

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

未開の大国の淋しい住人 (偶然か、それとも必然か)

時々話題に出る「個人金融資産1,400兆円」。一体そんなお金何処にあるのか？そう思われる方にもう一度その在りかを表にしてみる。

種類	金額	構成比率
現金・預金	766	54.1%
債券(国債等)	49	3.5%
投資信託	29	2.1%
株式出資金	104	7.4%
年金・保険	410	29.0%
その他	53	3.8%
合計	1,417	100%

(2002/3/31 現在：出所日銀 単位：兆円)

上表のように、日本の個人は総体として巨額の金融資産を持っている。それは厳然たる事実だ。この金額がいかに巨大であるかは、一寸計算してみると直ぐ判る。

1,417兆円の1%は14兆円である。50兆円は約3.5%に相当する。従って、この個人金融資産全体の利回りが3.5%上昇すれば個人の懐に年間50兆円というお金が入ることになる。50兆円は現在の日本の国家税収総額と同じだ。1,400兆円は、たった3%余で国家税収と同額の運用収入が得られるほど大きな金額である。しかし、この巨額資金は、吼えもせず暴れることもなく行儀正しく静かにしている。

きつと云うべきか、絶対にと云うべきか、この巨額金融資産は3.5%に遥か及ばないかつてない低金利に封じ込められている。

預貯金700兆円は銀行と郵貯で情眠を貪っている。その情眠振りは、100万円1年の預金金利がキャッシュコーナーでの1回の払出手数料で消えてしまうという現実露出しているが、本当の恐さはその情眠にあるのではない。この金融資産が、銀行を通じて国債へ大量に投じられ、そして郵貯を通じて財政投融資(今は表面的には無いことになっている)という第2の国家予算に当てられているところにある。

年金や生保にしてもその基本的な性格は変わらない。その400兆円を超える資金は何処へ向かっているのか。企業融資が、不動産が、それと

も株式か外貨資産か。年金・生保の資産ポートフォリオの中核には国家債務や地方債務が鎮座していることは多分間違いはない。

銀行(と名の付く銀行全て)はこの6~7年で110兆円の貸出金を回収した。預金は減っていないので、100兆円以上の資金が余剰化したことになる。その大半が政府債務・地方債務に当てられた。そして政府債務と地方債務を安全資産とカウントし自己資本比率引上げに使ってきた。不動産という後ろ盾を失った銀行の命運は、今や国債や地方債に握られている状況にある。

一方、郵貯250兆円、簡保120兆円は何処へ行っているのか。これこそ現実を直視するのが怖い位だが、それは国債・地方債だけでなく“あの”特殊法人等準国家機関に大量に流れている。民間金融機関が作った不良債権は約150兆円程度と云われているが、政府系機関が作った不良債権は一体どの程度あるのか見当もつかない。当の当事者だって分からないに相違ない。しかし、お金に関して云えば、政治も絡み利潤動機も働かない官が民間より規律正しく配分したと考えるのは愚かしい。官製不良債権は、おそらく「目も眩む」規模に達していると考えた方が自然だ。

こうして戦後、勤勉刻苦せさせと蓄えてきた我が国の家計は、今や「新たな危機」に直面している。それは超低金利に封じ込められお金として働く場所を失っているという危機から、金融資産そのものの危機への転位である。

この転位は鋭く深い。今や我が国(だけでないが)は、国も地方も皆「個人の懐」(家計)を当てにしている。当てにした予算を組み当てにした生活をしている。だから、「個人の懐」が預貯金や生保・年金内に止まっている限りでは国も地方も問題が表面化しないが、それが勝手に動き出すとたちどころに問題が噴出する。

ピーター・タスカ氏は近著で「経済活動の停滞は原因ではなく、結果である。より深い問題は、社会的混沌であり、批判精神の欠如であり、思考の停止である」と云っている。今、私達個人は、未開の金融資産大国にあって貧弱な果実に甘んじている淋しい住人である。貧弱な果実の後に何か実るものがあるかどうか知らないが、おそらく見えざる巨大津波は静かに近付いている。